
男の娘？いいえ、アホの子です

輝く三輪車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の娘?いいえ、アホの子です

【Zコード】

N6196Z

【作者名】

輝く三輪車

【あらすじ】

西暦2012年。世界はマヤの予言通り終焉を迎えた。

しかし全ての生が滅びたわけではなかった。

世界の崩壊が始まつた直後、運良く“螺旋”の外へ弾き出された者たち 即ち 終焉を逃れた者たちが、別の“螺旋”的に拾われ新たな“螺旋”へと世界を渡る。

じやじや馬“男の娘”的音燐と燐の世話係の“お母さん”こと
筑後燐はそれぞれ終焉を逃れた者の一人。そんな彼らが新たな人生を謳歌する。

これは“剣”と“魔法”の異世界物語。

(注)

- ・主人公と準主人公の漢字が似ているため読みづらいかもしだせ
ん。
- ・オリジナルなのは初めてなので不慣れです。ご了承ください。
- ・ですが、悪い所を指摘して頂けると喜びます。
- ・現在受験生なので更新は不定期です。

見た目からイメージする話し方は必ずしも一致しない（前書き）

受験のストレスのせいいかインスピレーションがわきわきなため書いてみました。

後先考えていませんが大まかな道筋はいろいろと思いついているため打ち切ることはないです。

見た目からイメージする話し方は必ずしも一致しない

西暦2012年。世界は終わりを迎えた

小鳥の^{さえ}轟^とりと、眩しい朝の陽光を浴び、顔をしかめてのそりと起き上^あがる男^おが1人。

その男の名は時音^{ときね} 燦^{さん}。齡^ねは成人一步手前の18。だが丸く大きな黒い瞳に少々丸みを帯びた鼻頭、小顔で赤みがかつた張りのある頬により実年齢よりも幾分か いや 大分若く見せ少年のように思わせる。

さらに、そこに“男性にしては長く艶やかな黒髪”を装備（地毛なのだが）することで少年といつよりも少女に。世にいう“男の娘”という存在である。

その彼（違和感が拭えないが便宜上『彼』と呼ばせてもらひ）は寝起きのためか虚空をぼーっと眺めている。

間の抜けたその表情は笑いを誘うが、面白おかしいそれではなく親が子に向けるものと同じ温かい微笑み。さらに女性であれば母性を、男性であれば父性をくすぐられるであらうあどけない表情でもある。美男美女は何をしても絵になると言われるが彼もそれに当てはまるだろう。なんとも羨ましいことだ。

彼がふあつと大きなあぐびと共に伸びを一つ。

やつと活動しだしたよつだ。

「…………あれ？…………どうだこい…………？」

彼は周りを見渡してんと首を傾げた。

純粋！首を傾げるという単純な行為が、極悪非道と謳われる（…）罪人を瞬く間にロリコンあるいはショタコンに田覚めさせる…（確定）。それほど純粋なのだ…！一種の生物兵器と言つても過言ではない。

そんな兵器認定を受けた彼は寝ぼけ眼をこすり、田を開いた。

まず彼の視界に入ったのは本を詰められるだけ詰め込んだ感の漂つ本棚。そして右にすらすと白い扉。さらにすらすと年代を感じさせる木製の丸机に椅子。上を見上げると天井を覆い刃くへすように貼られた色々な記号の書かれた紙が何枚も。後ろにある窓の向こうに生い茂る木々が。鹿や鳥などの動物もわざわざ。

「…………あれ？…………どうだこい…………？」

再び首を傾げ、困惑氣味の燐。^{さん}

どうやら彼にとつて今挙げたモノは全て馴染みがないようだ。

「…………俺つてどつかに旅行中だったか？…………いや昨日はすみんと家で寝たよな…………。

……じゃあ誘拐か？…… そうか誘拐か。この年で誘拐されるとかマジないわ

自問自答により『誘拐された』という考えに至つたようだが、一般的な体格の成人男性が優に通れるほど窓を難なく開閉できる（燐

はそのことを知らないかもしれないが（部屋に攫つてきた者を閉じ込めるだろうか？
もしそうならばその誘拐犯は余程間抜けだったのだろう。

「ん？」

不意に部屋の扉がノックされた。

「ハツ、わざわざ俺に殺られに来るとはバカなヤツだな。俺の108ある必殺技の1つをお見舞いしてやるッ」

燐は殺る気満々のようだ。

彼は静かにベッドからフローリングの床へと降り立つ。そして足音を消して とは言つても床がそれなりに古いためキイキイと軋む音が小さく響くが 素早く扉と本棚の間、即ち誘拐犯（仮）が部屋に入るまで彼のことを気づかない絶妙な位置に姿を隠す。

ガチャリとドアノブを回す音と共に扉が開いた。

（先手必勝ツ！）

「ブルウツムンツデツスツトツロイヤーツ！」

全身の“バネ”をフル活用し、右手一本に力を収束した渾身の一撃。

『ブルウツ』と言い出した時点で撃ち出しているので誘拐犯（仮）の耳にその声が届いた時には既に拳は鳩尾5cm前。完全な不意打ちだ。

『ブルームーンデストロイヤー』。名の通り『水月（鳩尾）を破壊するほどの一撃』。『速い！鋭い！重い！』の3拍子が揃つて初めて免許皆伝、というのがこの技を燐に教授した近所のお兄さんの弁。幾度となく敵 主に練習相手であった近所のお兄さん を屠つ

てきたその一撃は誘拐犯（仮）の鳩尾へ吸い込まれるように見事に
きまつた

「 いひ、 危ないだろ？」

かのように思われた。

なんちやつて武闘家の近所のお兄さん（実力有り）ですら避けられない BMD ブルーハンデストロイヤー を誘拐犯（仮）はその拳が鳩尾に達した瞬間、人間では有り得ない速度で反応、そして体を反転させ避けた。それにより燐の顔が驚愕に染まり、それと共に勢い余つて部屋の外に転がり出そうになる。だが心優しい（？）誘拐犯（仮）が彼を優しく受け止めた。

「 燐。 ちゃんと相手が誰か見なさい」

燐のことを知つていいように彼を咎めるような口調で告げる。

「あ？」

その聞き覚えのある声に燐は襲つのをやめ、支えられている状態から離れて誘拐犯（仮）の方を見る。

するとそこには燐とは対照的な青年が立つていた。

青年は切れ長のライトブラウンの双眸、すつきりと通つた鼻筋、彫りが深く野性味溢れる顔立ちで、長めのウルフ。身長も燐が168cmと小柄なのに対し2mに届くかというほどの長身。

年は燐と同じく18歳なのだが、燐とは違い少し前まで少年だった
ということを微塵も感じさせない。

「 お、 燐 りん じゃねエか？ どした？」

青年の名は筑後 燐。燐の幼なじみであり、暴走する燐の唯一のストッパー。そのため周囲からは大変重宝されており、男だと語りの「お母さん」と呼ばれている。その所以は見た目に似合わない丁寧な物腰にある、というのがもっぱらの噂だ。

「話があるからついてきなわー」

「あいあこわー」

燐の言葉に敬礼を返し、部屋を出る。

部屋を出たことで燐の得た情報は、彼が眠っていた部屋が廊下の端に位置するということと他にも、部屋ほどあるということ。

突然だが『暴走』と書いて『燐』と読むほど燐は暴走と縁が深い。そんな彼が閉じられたら扉を見て我慢できるだらうか、いやできない（反語）。

そんなわけで燐は躊躇つことなく一番近くの扉のドアノブに手をかける

「拉致」

前に燐に流れるような動作で腹を搔つ攫われ、脇に抱えられてしまつた。

流石長年燐の世話をしてきたためその動きは、月を映す水面のよう

に穏やかで、且つ流水の如く滑らかで惚れ惚れするほどだ。

「オイ！…燐離せッ！…あの部屋に何かがあるって俺の五感が告げてんだよッ！…」

犬歯を剥き出しにしてフーッフーッと猫のよつに燐を威嚇する。だが童顔のため効果はなさそうだ。寧ろ微笑ましい。

「そういう時は普通『五感』ではなく『第六感』と言います。覚えておきましょう」

「インテリア振ンな……」

「『インテリ』ね」

「ぐつ……あ、揚げ足ばつかとんなッ……」

「はい、よくできました」

よしよしと脇に抱えたまま燐の頭を撫でる燐。そんなやつとりをして『る内にリビングらしき場所へ。

「やつと来たか。待つておつたぞ」

リビングに着いて早々に2人に声がかかる。その声の主は目を瞑つた、真っ白い髪を蓄えた老人。

「ん? 誰だじーちゃん?」

未だに脇に抱えられままの燐が老人に問い合わせると、老人はその言葉を待つてましたと言わんばかりに目をクワツと見開いた。

「待つておつたぞその言葉……」

実際待つていたようである。

「ワシはなッ……時空と豊穣の神クロノスじやッ……」

ガタツと椅子から立ち上がり大仰な身振りで誇らしげに老人 改め 老神は告げた。

老神が誇らしげな一方その頃

「燐。アホが感染るから見ちゃ いけません」

「コラ、目エ隠すな！！あのじーちゃんぜつてー神だつて！！威厳タップリじやねエか！？あの髪見ろッ！…長エし白エレッ…！」

「はい、確かに髪タップリですね」

「もうじやねエ！？」

2人で漫才をしていた。

実に可哀想な老神である。

「それはそうと燐にも先程の話を」

「……わかつたがのう、オヌシもその子ほど反応してくれんかの？」

「過ぎたことを気にしていては神も人も前には進めませんよ？」

燐は老神の申し出を斬つて捨てた。

「……手厳しいのう。ま、いいわい……。

「それで話したい」とじやがな、オヌシたちをワシの世界へ送る
がよいか？」

「……意味わからん」

「そのまんまの意味じやよ。

オヌシたちの世界は滅びたのにオヌシたちは生きとる。じゃから代わりの世界で残りの人生を謳歌してもらいたいのう、とこうワシなりの気配りじや」

「……え？何？」

今の説明で燐の脳内メモリーは容量オーバーのようだ。些か少なすぎる気もするがそれを補つように燐の脳内メモリーが膨大なので無

問題。

そんな燐の様子を見て燐が説明しだす。

「俺たちの世界滅亡」、これの意味は分かりますか？」

「あんまバ力にすんなよ？ 地球が木つ端微塵になつたとか宇宙人の侵略とかそんなとこだろ？」

「……まあ、そんな感じです」

「んで？」

「世界は死んだけど俺たちは死んでないから残りの人生を楽しめ、と言つことらしいですよ？」

「OK。理解した」

燐の場合最初と最後さえ分かれれば間をどれだけ端折つても問題ないみつである。

「んじゃや、燐。じーちゃんの世界にせびーやりて行くんだ？」

「……どうやって行くんですか？」

老神の世界への行き方は聞いていないよう燐は老神に尋ねた。

「ワシが飛ばす」

「どうこつ意味ですか？」

「転移魔法で飛ばす」

その老神の言葉に燐が反応する。

「“魔法”！？？」

「おー、やつじや言ひ忘れておつたな。

ワシの世界には“魔法”があつての、ふあんたじーでくれいじーな
ちよべりばわーるじなんじや」

「……じーひやん。テキトーに知つてゐる単語並べるのはやめといた

方がいいぞ？しかも大分古いのが混じつてたし

「む、そうかの？ま、気にするでない」

「あの、もしかして俺たちって魔法使えるんですか？」

「つむ、使えるぞい」

燐の間に老神が深々と頷いた。

「マジかッ！？手から炎とか出せんのー？」

「もちろんんじや。」

「そうじやな……魔法の属性を選んでみるかの？ワシからのかーびすじや。

基本属性の魔法と特殊属性の魔法。どっちがよいかの？」

「それじやあ、まず基本属性は何があるんですか？」

「基本属性は【火】【水】【土】【雷】【風】【光】【闇】の7種類じやな。

『属性の心臓を理解できればある一つの属性にすべては収束する』とこ「う」と覚えておくと良いぞ。オヌシなら心臓に辿り着ける気がするしの』

「1つの属性に収束、ですか……」

「シンズイとかシユーソクとかそんな話はーーから特殊属性は？」

「特殊属性はの、【時】【空】【音】【幻】など。ワシも把握仕切れどらんのう。それなりにあつたし覚えきれなんだ」

ハツハツと朗らかに笑う。

「さて、どれがいいかの？」

「俺はもちろん【火】ッ！？」

「わかつたぞい。オヌシは？」

「……それでは【土】で」

「ふむ、2人とも基本属性とは少々驚きじやな。こつこつ場合は特

殊属性を欲しがるものじゃと思つておつたがなかなか違つてゐるぢやな。

折角じやし、特殊属性も付けてやるつ。

『“時”音 燥』と言つ名前じやしオヌシには【時】を、『“筑”後 燐』じゃからオヌシには【音】をな

そつ告げると老神が手を淡く光らせて2人の頭にその手を置いたが、時間にして1秒にも満たないうちに手を放した。

「ほれ、これでおしまいじや。魔法の使い方は実践で身につけると良からう」

「あ、おひーーー気になつたんだけじが、なんで俺たちの名前知つてんだ?」

「そりや、ワシ神じやしな。

それではそろそろ飛ばすぞ?」

「え? ちよつーーーまだいろいろ聞いてませんよーーー?」

「自分の目で見て知ることも大事じやや。

そつこうわけじやし、また余つ口を楽しみにしておるや」

老神が言い終えると2人に口を開かせる暇を『えず、彼らの足元に半径1mほどの魔法陣を展開、そして発光。その眩しさに2人は咄嗟に目を閉じ、光が止んだあと再び目を開くとそこには老神の姿はなく、代わりに生い茂る木々が視界いっぱいに広がつていただけであつた

見た目からイメージする話し方は必ずしも一致しない（後書き）

燐と燐にフリガナあるのとないのではどちらの方が読みやすいですか？

一応これからも付けたつもりなので意見を聞いておきたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6196z/>

男の娘？いいえ、アホの子です

2011年12月20日20時56分発行